

2年間を振り返る

担当者としてこの講座を始める前に次の二つの課題が念頭にありました。一つは、3ペーJで理事長が言及しているように、多様化が急速に進み社会の課題が複雑化する状況を見据えて、TJFがめざしてきた「多様な背景をもつ人たちが、互いを尊重し合いながら新たな価値をつくり出す社会」をどうやって具現化していくのか。もう一つは、学校の外側にいる財団だからこそできることは何なのか。ここには今後、少子高齢化や気候変動、国際情勢の変化などにより、社会構造も自然環境も大きく変わっていくなかで、何をすれば次の世代にとって生きやすい社会を残せるのかという問いもありました。

そんな折、テングーさんのことを知りました。テングーさんは、さまざまな課題を抱える地球環境や社会において、まさに次の世代に何を残せるのかという視点から、個人と社会をとりまく問題の構造を明らかにし、新たな仕組みと技術を創造することによって解決しようとする研究、実践していました。現代社会の課題を直視しながらも、異なる主義や信条をもつ人の考えを「ことばによる

教え(ソフトウェア)で変えようとはしない。代わりに、この講座で扱ってきた火熾ストーブやドライトイレ「コヤッシュ」のように、具体的な物(ハードウェア)を作り出すことで別の仕組みを動かそうとする。しかもその方法は、大掛かりなプロジェクトを立ち上げたり、特別な設備や材料をそろえたり、多くの費用をかけるなくても、ひとりりて始められるものばかりです。TJFがめざす「多様な背景をもつ人たちが価値の対立を越えて互いを尊重し合う」社会をつくり出していくための次の手がかりを、テングーさんの知見から得られるのではないかと。そう考えて、この講座の企画を始めました。

構造をとらえリアリティを見ていく

2年間を振り返るとこの講座は、テングーさんの技術を受け取りながら「テングーさんがその技術にたどり着くまでのプロセスを体験する場」でした。第12回「生き物の輪に戻るためにドライトイレを作ろう」を例に、参加者の皆さんがテングーさんに道案内されながら体験した、構造を解き明かし解決策を導き出すプロセスの一部をご紹介します。

まず、貧困などの理由によって「安全で衛生的なトイレ」と「公衆衛生の知識」がない状況が、多くの子もたちの死につながるのを見ていきます。そして、トイレが「大腸菌や寄生虫などの病書を封じ込めて管理する」機能をもつことを知ります。次に現代的な水洗トイレと下水道設備に視点を移します。すると、下水道というシステムが、都市のように人が集まって住む場所ではその集団に対してとても衛生的な働きをする一方で、高度な設備をもつても一定量残ってしまいうる窒素などの物質が海や川や他の生き物に影響を及ぼし、離れた場所の人たちに不利益を生むことがわかってきます。さらに視点を変えて、今度は人の糞尿の毒性と栄養分に着目します。すると、便は大腸菌などの有害物を含むけれど、尿はほとんど無害で、むしろ植物の三大栄



テングーさん設計のドライトイレ「コヤッシュ」。ポリプロピレンシートを切り抜き、手で折って組み立てる。

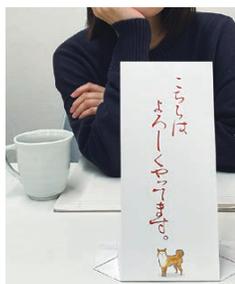
養素の窒素・リン酸・カリウムを豊富に含むことを知ります。こうして複数の角度から読み解いていくと、この構造がもつ次のような要素が明らかになりました。「トイレがないことは子どもたちの死につながる。一方で、高度な下水道設備でも残ってしまう物質は他の地域の人や生物に害や不利益をもたらす。しかし、その残留物質は植物の栄養にもなり得る。」

ここまですふまえて、この問題の解決案の一つとしてドライトイレ「コヤッシュ」が提示されます。コヤッシュは「人体からの窒素・リン酸・カリウム回収装置」で、尿と便を分離し、尿は植物の肥料として利用、便は灰や日照を使って滅菌した後土に戻します。また、資金や資源、設備を持たない個人が取り組めるように、2ドル以下の材料で、かつ折り紙を折る要領で容易に作れるように設計されています。さらに、薄くて平らなポリプロピレンシートを主な材料にすることで、大量輸送ができてコストが抑えられる、災害時に備えた備蓄も可能になり、廃棄時に燃やしても有害物質がほとんど発生しませぬ。

このように、この講座はドライトイレなどの物を作る技術を身に付けながら、その物が生まれた背景にある問題の構成要素を解き明かしていく方法と、物自体が新しい仕組みを動かすための設計方法も、一緒に受け取っていく構造になっていました。さらに、作った物を使っていけば、今度は自分が新しい仕組みを動かす側に移行していくことになりました。

自立した、対等な個であるために

ハードウェアによって構造を変える考え方は、講座全体の設計にも採用されていました。例えば、この講座では、その場にいる全員が自立した対等な個であることを大事にしていました。そのため、テナーさんとTJFは、参加者が「講師や運営側の指示に従う」のではなく、「自分がどのようにするかは自分が決める」ようにしたいと考えました。もし「作業のスピードが自分には速すぎる」と思ったら、「ここからは録画を利用して自分のペースで学ぶ、今は見るだけにする」など、自分で判断してほしい。そこでテナーさんが考案したのが「こちらはよろしくやっています」ボードです。このボードを画面の前に掲げれば、全員の前で断りを入れるという精神的負担を負うことなく、自分の望む過ごし方ができます。他の人たちは、その人に何か問題が起きているわけではないとわかります。ボード



を掲げることが、「自分のニーズの実現」と全体の進行や周りの学びを邪魔しない配慮を両立させていました。6ページの「自分で自分の実践に責任を負う」話に通じる、「自分の学びを誰かに委託せずに、それぞれが担う」場の設計の二つでもありました。

人生に役立つ知恵として学び直す

講座では毎回、「試すー観察するー思考する（仮説を立てる）」という探究のプロセスが繰り返されました。その過程では学校で習った知識が人生に役立つ知恵として学びなおされることもしばしばでした。例えば火起こしでは、燃焼の三要素（酸素と温度と燃えるもの）や摩擦、身体の重心のかけ方などの条件がそろわないと火は起きません。なかなか火が起きない状況の前に、テナーさんが「何が足りないから火は起きないの？」「なぜそれが足りないってわかるの？」と問いかけます。その問いに応えようと観察の解像度を高め、見つけた手がかりに学校で習った知識を掛け合わせながら仮説を立て、また試す。その繰り返しがまさに、知識が身体感覚を伴って目の前の現象と結び付き、自分の人生を助ける智慧へと変換されていくプロセスです。「何が足りないのか？」「なぜなのか？」を探究する時間は、自分の都合とは関係なく存在している「世界のリアリティ」に相対する時間でもありました。

講座終了後は、参加者インタビュー

(16ページ)に登場した前村春樹さんのように、身に付けた技術を背景にある考え方も含めて他者に伝える側になった方たちや、島田晶子さんと宮崎宏康さんのように教育現場で取り組みを始めている方たちがいます。ほかに多くの方がご家庭や地域で実践を続けています。

自分の手で選択肢をつくり出す

改めて講座全体を見渡すと、テナーさんからおすすわけされたものは、さまざまな問題に出会うことも、他者が奪うことなく、自分の手で選択肢をつくり出して生きていくための考え方や具体的な方法でした。社会構造も地球環境も大きく変動するなかで、次の世代は今よりも多くの困難に直面するかもしれませんが、そのときに、テナーさんのあり方は、「自分には何もできない」「しょうがない」と目を閉ざしたり諦めたりせず、希望をもって生きていく一つの方法を示してくれていると思います。

運営側としては、参加者が「技術を身につける当事者」として、「テナーさんが本気で問題を解決しようと試行錯誤した道筋」をたどったところに、この講座の核心部分があったと考えています。「本気で解決」しようとする、自分が慣れ親しんでいるものだけを例のように始めません。コヤシンの例のように、問題を構成している要素にはどんなものがあるのか、それぞれの要素がどのように作用し合っているのかを見ていくことにな

ります。リアリティをつぶさに見て解決点を見いだし、他人の思想信条を変えるのではなく、仕組みを変えることで問題を解決しようとする。そのあり方はまさしく、多様な人たちが互いの違いや対立を越えてともに生きていくときに必要とされるものです。加えて、この「構造を解き明かし仕組みを変える方法」を見出すプロセスは探究の道筋そのものでもあります。これらを当事者として濃密に体験するからこそ、今後の人生に役立つものとして強く残っていく、そこにこの講座の醍醐味の一つがあります。

冒頭に挙げた二つの課題に立ち戻ると、「自分たちをとりまき問題を構成する要素（リアリティ）をつぶさに見ていく方法」と「問題を問題にならないように変えていく方法」を、先行する実践者とともに当事者として体験する場をつくりたいこと、それが、今後社会や自然環境が変動しても、多様な背景をもつ人たちが、対等な立場で新たな価値をつくり出して生きていくために、TJFが学校の外側においてできることのひとつだと考えています。この2年間の蓄積をもとに、今後は地域や学校でワークショップを行うしていきます。

(事業担当 室中直美)

*1 テナーさんのこのような断り方を変える考え方に、テナーさんがあります。詳細は、第3回のワークショップを参照してください。
*2 対等性という観点からこの講座を支えていた考え方に、NVCが関わっています。詳細は、「秋の特別講座のワークショップ報告書」をご覧ください。
*3 本記事の執筆には、16ページのQ&Aコーナーを参照してください。